



かばん職人としての生活をスタート 生き生きと働く母を目指して

おくむらあやこ
奥村彩子さん(36歳)正法寺



かばんのエキスパートを養成する専門学校「トヨオカカバン アルチザン スクール(中央町)」を卒業し、4月から市内のかばん会社で、かばん職人としての生活を始めるのが奥村彩子さんです。

大学卒業後、事務職として勤務しましたが、出産を機に退職。子育てに専念する中で「生き生きと働く母の姿を子どもたちに見せたい」と考えるようになりました。モノづくりが好きだった奥村さん。「子どものころ母にかばんを作ってもらったうれしかった」と生活に

身近なかばんを作る職人になる決意をしました。

同スクールでは、かばんのデザインや型紙作り、縫製などを11人の仲間と1年間学びました。かばん漬けの毎日を楽しかった反面、家事との両立には苦労したとのこと。「私の夢のために転職し、一緒に千葉から引越してくれた夫や子どもたちの協力には感謝しかない」と話します。

「持つ人の期待に応えられ、高品質で長く愛されるかばんを作りたい」希望に満ちたかばん職人の誕生です。

Toyooka Topics —とよおかの“旬”な人と話題—



▲思い思いに瓶の中をデザイン

「大草原の草花」関連ワークショップ 自分だけのフローラルハーバリウムできた！

3月9日、日本・モンゴル民族博物館で開催中の企画展に合わせて、花を通して自然に親しむきっかけになればと「ワークショップ フローラルハーバリウム」が開催されました。

初回のこの日は女性5人が参加。瓶と中に入れる花を選び、ワークショップが始まりました。配置を考えながら瓶の中に花を入れていき、最後にオイルを注ぐと、光の当たり方でさまざまな表情を見せるハーバリウムが完成。以前ハーバリウム作りをして虜になったという石谷優菜さん(五庄小2年)は「楽し過ぎた!」と、作る過程にも完成した作品にも満足そうでした。ワークショップは、新緑の5月まで開催されます。

コウノトリKIDSクラブ アカガエルの産卵場所を整備

3月9日、田結湿地で、コウノトリKIDSクラブのメンバーら約20人が、湿地に生き物を増やすための保全活動を行いました。

同クラブは、豊岡の自然に関心のある、市内の小学4年生から6年生までで構成された団体です。この日は、2月下旬から産卵を始めたアカガエルの卵塊を調査。「水がたまった場所を好む」ことを発見したメンバーは、比較的乾いた場所に穴を掘り、水路から水を引き込み、産卵場所や他の生き物のすみかになる湿地を増やしていきました。

田中大貴君(奈佐小6年)は「生き物が増えて、豊かな食物連鎖につながれば」と期待を込めていました。



▲新たな湿地が完成